

(様式1)

令和6・7・8年度「京都府学力・学習状況調査～学びのパスポート～」
学校改善プラン(1年次)【小学校】

【学校名等】

学校名	南丹市立園部第二小学校							校長名	坂瀬 一哉
学 年	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	特別支援	児童数	201名
学級数	1	2	1	2	1	1	3		
事業担当教員名	吉田 直晃								
① 中学校区で目指す子ども像	人とのつながりを大切にし、主体的に生きる子どもを育成しよう ～ 保幼小中が一体となって取り組む非認知能力の育成を目指して ～								
② 目指す子ども像	・人とのつながりを大切にする子 ・主体的に学ぼうとする子 ・自らの考えをもち、表現する子 ・協働的に学びを深める子								
③ 目指す子ども像に対する現状と課題	・目標が明確であればあるほど、前向きに一生懸命頑張れる児童が多い。 ・ペア学習やグループ学習では、盛んに話ができるが、全体での話し合いの場面では、自分の思いや考えを伝えることができない児童が多い。 ・集団の中で物事を解決していこうとする意欲が低く、話し合いの中で出た意見が全体の場の意見になったり、より深い学びにつながったりしにくい。また、解決困難な課題に対して、粘り強く関わり、課題解決しようとする動きになりにくい。								
④ 目指す子ども像に達するための仮説	【仮説1】 子どもの主体性を引き出させる授業の実現 焦点化された課題を提示することで、学習課題を自分事として捉えさせ、児童自身が「知りたい」「学びたい」と意欲をもって学ぶ授業展開を仕組むことで、様々な課題に対して主体的に解決しようとする児童の学ぶ姿勢の高まりを生み出せるのではないかと。 【仮説2】 根気強く話し合っ課題を解決しようとする学級風土づくり 課題解決に向けて主体的に取り組もうとする児童の増加は、一人では解決困難な課題に対しても根気強く取り組む学級風土をつくる。その中で対話的に学ぶことの必然性に出会い、そのよさに気づき、対話的に学ぶ術を児童自身が獲得しようとする姿につながるのではないかと。 【仮説3】 個別最適な学び、個に応じた学びの実践 「AI ドリルすらら」の職員研修を行い、職員のタブレットを活用した授業実践力の向上を図る。それが、個別最適な学びを全児童に効果的に作用させ、学力向上につながるのではないかと。								

令和6年5月1日現在

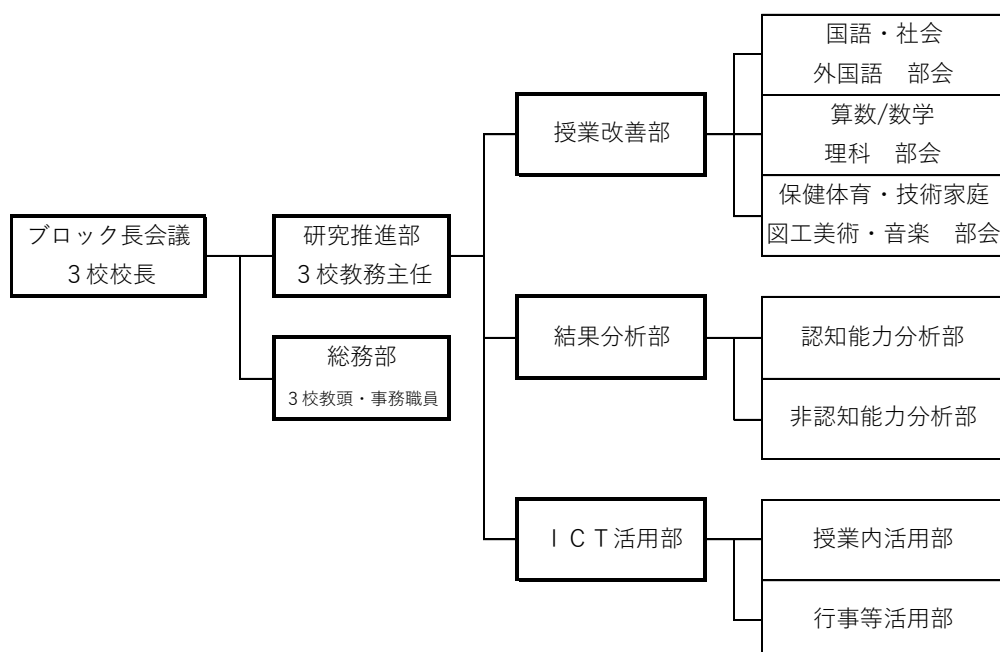
【1 研究主題】

人とのつながりを大切にし、主体的に生きる子どもを育成しよう

【2 研究組織体制】

※希望調書を基に図等を用いて分かりやすく記載してください。

(1) 中学校ブロックの組織体制



(2) 校内の組織体制



【3 研究計画・具体的な取組内容】

実 施 月	研究内容、研究方法、成果の公開 等
4 月	
5 月	AIドリル すらら 校内研修 (5月22日 園部第二小 園中ブロックに案内)
6 月	校内研究授業① (園中ブロック授業研)
7 月	すららドリル 校内研修
8 月	8月上旬*学びのパスポート結果返却、第1回分析・活用研修会 すららドリル 校内研修
9 月	すららドリル 校内研修 校内研究授業② 校内研究授業③
10月	校内研究授業④ 公開授業

	10月上旬＊第2回分析・活用研修会
11月	校内研究授業⑤ すららドリル 公開授業
12月	
1月	すららドリル 校内研修 校内研究授業⑥ 校内研究授業⑦ ＊研究校交流会（予定）
2月	校内研究授業⑧
3月	

【4 仮説及び成果を検証するための質問項目】

学年	質問番号	質問項目	概念	備考
全学年	43	人の話をじっくりと聞くことで、自分の考えがまとまることがある。	思考の柔軟性	
全学年	30	自分の考えた道筋をほかの人の視点からも考えて、見つめなおすほうだ。	自己調整	

＊5・6の分析の項目は削除しています。

【7 分析結果を踏まえた指導改善、個に応じた具体的な手立て】

個に応じた具体的な指導・支援方法

- ・学習支援員と連携し、その児童に合わせた声掛け・支援の方法を工夫・実践していく。
- ・具体的で、明確な発問をする。（何について話し合っているか黒板に明示する）
- ・学びの視点を明確にして集団解決を図る。何を使って解くのか。何を生かして説明しているのかを明確にして授業を進める。
- ・自らの課題に気が付かせ、復習問題に取り組ませる。
- ・ペア等グループでの話し合いを増やす。（自分の考えをもたせたり、調整したりさせる。）
- ・支援しすぎない。自ら考える児童を育てる意識を忘れない。
- ・学級を学力低位、学力中位、学力上位の3つに分類し、授業研で狙いの達成度を調べていく。そうすることで、児童の学力の段階に応じた効果的な指導を模索する。
- ・自分で解決できないことがあっても、他者と関わることで解決できるという経験を積ませる。

集団としての指導・支援方法

- ・授業以外でも積極的に話をさせる場を設定し、意見交流をさせる。
- ・授業の導入部分でこれまでの学習で学んだことを短時間で復習させてから本時の学習に入らせる。
- ・朝学習（10分）に週に1度AIドリルに取り組ませ、学習の習熟と、AIドリルへの関心を高める時間を取り入れる。
- ・授業の後半には習熟問題に取り組ませ、授業の理解度を確認させる。
- ・児童同士で話し合わせることで解決させる授業展開を積極的に設定していく。
- ・友だちの考えを取り入れることのよさが実感できる授業を作る。
- ・考えをより良いと感じた方向に変えることのよさを学級全体で価値づけていく。
- ・よりよい学び方についても授業後に振り返りをさせていく。

【8 仮説の修正】

【仮説2】根気強く話し合って課題を解決しようとする学級風土づくり

根気強く学ぶ姿は比較的高い。

課題解決に向けて主体的に取り組もうとする児童の増加は、一人では解決困難な課題に対しても根気強く取り組む学級風土をつくる。その中で対話的に学ぶことの必然性に出会い、そのよさに気づき、対話的に学ぶ術を児童自身が獲得しようとする姿につながるのではないかな。

【9 具体的な取組内容の修正】

- ・平日の家庭学習、休日の家庭学習の時間が少ないことが明らかになってきた。担任は授業の中で学習内容の習熟を図ることを目指し、児童にあった課題の出し方や授業方法などを検討していく必要がある。
- ・授業実践の在り方として、授業は履修型と習得型の2つに分けられる。前者は知識等の伝達や活動を中心とした授業方法であり、後者は学習内容をその授業の中で児童の中で定着させるものである。本校では、習得型の授業づくりに力を入れている。
- ・主体的な学習や個別最適な学びの実現を目指す1つの取組として、AIドリル「すらら」を生かした学習を進めている。朝学習をはじめ、週末にはタブレットを持ち帰って学習させる（「週末すらら」）、休み時間など空き時間に「すらら」を活用して学習をすすめる（自主学習や「すららカップ」）といった、児童主体の学力向上の取組を進めている。
- ・校内研究の指導案に、非認知力向上のための取組についての項目を設け、授業の中での実践内容を記載し、取り組んでいる。

【10 児童の変容（普段の様子から）】

- ・本校実施の授業アンケートの中で、進んで挙手していると回答する児童の割合が（6月）肯定的評価52%が（12月）肯定的評価62%に増加している。挙手の割合も増え、授業に積極的に参加する児童が増えてきている。
- ・話し合い活動では、積極的に意見交流できる児童が増えている。
- ・「すららドリル」の活用率が増え、進んで学ぶ姿勢の高まりがみられる。5月の全校の「すららドリル」のログイン回数が974回であったのに対して、2月には4211回と増加している。

【11 2年次の研究構想】

- ・質問調査の重点項目については、来年度には中学校ブロックで設定する。取組については、さらに小中の連携を考えた実践をしていく。
- ・学びのパスポートで実施した質問調査では低学年の調査がとれない。重点項目だけでも低学年版の質問調査を作成し、年間通して調べていく。
- ・非認知力向上に向けた取組に関しては、研究部と連携して進めた。さらに効果を高めるためには、行事や普段の学級経営とも連携をしていく必要がある。児童からの評価をその都度担任に返し、次の取組に活かす。
- ・学びのパスポートから得られる「個で見取る視点」を学力向上の取組に生かしていく。評価対象を学力層ごとに選び、その児童を対象に向上させていく取組を各学級で実践する。その実践の成果を各学級の質問調査からみていきたい。